

論文の和文要旨	
論文題目	暴力の犠牲者か、英雄主義の犠牲者か？ ウガンダの革命的体制文化と生存黙示録の 関係学的歴史分析
氏名	カルンガリラ・イアン
<p>歴史的変化を巡りウガンダの政治環境全体を覆った高揚感は何もないものだった。それは、1962年の英国の植民統治からの独立後に確立された国家無政府状態を、ムセベニが1981年から1986年にかけて完全に打倒した革命的な闘争の後に現れたものであった。この興奮の後には、1986年から新憲法が制定された1995年までこの国を管理した（少なくとも植民地支配の終わり以降にウガンダが目撃した他の民政移行と比べ）比較的統制された国家革命軍が指導した民政移行が続いた。1995年には、憲法が政治行為の道筋を決定し、国家と市民に相互に責任と義務を持たせるといった新しい時代が到来した。憲法は、国家とその国民の間の鮮明な契約のように見えた。1995年の憲法は、政治権力の貪欲に対する予防策を提供し、誰もが政治劇場を専有物とする試みを制限した。またこの憲法は、大統領が5年の任期で二期に亘ってのみ支配し、その後は政治権力が政治のプロセスを通じて所有者を自発的に変更することを約束した。それは、1980年の選挙過程とは異なる公正な競争と公正な選挙の実践を約束したのだった。しかし、そのような展開は現実のものとはならなかった。2001年の第2期のムセベニ大統領選挙中、さらに選挙に勝って政権を握った後の期間から明らかなように、革命家たちによる無数の政治的行動が憲法の道筋に抵抗し始めたため、全ての集团的期待は夢に変わってしまった。</p> <p>2005年、ウガンダの1995年憲法が改正され、権力保持に対する最初の保障措置が削除された。すなわち大統領の任期について、大統領在任任期の厳格な（1期5年の）2期に限る制限が解除され、大統領は望む限り（何度でも）選挙に出馬できるようになった。またこの国は運動政治システム（単一政党制）から複数政党制に入ったが、競争は憲法上の実践、国家機構、また軍の政治介入で制御され続けた。大統領選挙は、公共</p>	

/社会サービスが国民に手を伸ばすことができる唯一の場となった。 いずれにせよ、大統領に絶えず反対した選挙区には、水、電気、道路などの社会サービスの優先権はないことは明らかであった。“mwalonga bubi”（文字通りの意は「間違って投票した」）というよく知られるフレーズがあるほどだ。また、競合的な選挙過程は、革命体制（ムセベニ主義）が2001年以来、特にキーザ・ベシジェ博士からの一貫した反対に直面したため、戦場と化した。同様に一般的なのは、逮捕、拷問、拘留を含む、新興野党を封じ込めるための暴力の使用だった。

サハラ以南アフリカには、ヨーロッパの植民地主義からの独立以来、成功裡に政権交代を経験した国がいくつかあるが、この体制の移行はむしろ不可能だということを見出した国もいくつかある。私は本論において、革命的な体制を再活性化させ、それらの耐久プロジェクトにさらにパワーを付与する文化の育成に関する動態を探求することを目指す。私の関係学的アプローチは、構造的・制度的、文化的小および主体の構築主義的ダイナミクスに対処することを目指している。過去の戦争の記憶と未来への恐怖だけでなく、国民的政治イデオロギー、国家の腐敗と家父長制、長引く抗議活動の意図しない結果と国家の抑圧的な装置がいかに絡み合い、その中で政治体制の支配が成功する文化的政治システムを生み出すかを解明したい。こうした分析では、個々の権力の個人化の叙述および革命的なシステムの構造的関連性は、相まって自己強化していくと解釈される。

本研究の文脈は、既存の政治秩序化の変更に異議を唱えることを妨げる基本的な政治プロセスの明確化に付随する困難さの指標としての、「政権交代のパラドックス」と「政治権力の移行」である。以下の目的を通じて、因果関係のメカニズムを説明する。最初に、私は（個人、世代、集団/国の両方のレベルでの）悲劇的な過去の記憶が革命体制の形成と維持にどのように影響するかを示したい。第二に、革命的な体制強化基盤における軍国主義および/あるいは軍事支配の役割を説明する。第三に、新家産制国家を基盤とする腐敗がどのように革命体制の安定メカニズムに貢献しているかを実証する。第四に、抗議/暴動/戦争がいかに政治的現状の強化において新しい意味を獲得し、維持するかを説明する。これらの目的から、次の質問が生じる。これらの絡み合った諸目的の中での政治はどのようにして特定の政治文化を構築するのだろうか？そして、文化はどのようにして政治（権力と体制）を構築するのだろうか？政治体制と権力研究における政治文化を構成するものは何だろうか？これらの質問に反映されている中心的なテーマは、「政治権力」、「体制」、および「体制変更」に関する危機と複雑な問題

である。それらは、戦争や歴史、国民イデオロギーにかんする記憶、抑圧、国家の腐敗、抗議活動といった事柄それぞれの役割が深く「埋め込まれ、相互作用する事柄」として構成されている状況での問題である。

私はまた、国家、政府、あるいは体制（また学校、教会、家族でさえ）などの有形的な制度が、政治権力が体制の安定性に影響を与えることに関係しながら、市民・政治的文化実体—規範、儀礼、信条—を培養する場であるという想定についても問いただす。そのような文化的実体の正当化と意味化は、以前の政権による苦境への共鳴、ならびに現在の権力者のイデオロギー、個々のアクターの利害、抑圧（および他の形の公的不処罰）、大学の抗議活動を例とする長期の国内闘争に大きく依存する。

本論の目標は、なぜ部分的に参加型選挙過程（より適した用語がないため参加型政治とする）が根本的な体制変更を必ずしも保証しないことを説明することにある。近代国家の機能、複数政党民主制、人権および自由の普遍的な表現は、政治的君主の叙述の誤った解釈、虚偽の陳述と同じプロセスに葬られているように見える。私は、なぜ、そしてどのように、抗議活動のような政治的变化の型破りな源が、むしろ（回顧的な分析の多くにある）政治秩序の変化ではなく、体制の反対派と闘争への（疑似的な）開放性を正当化することになるのかを例証する。

私は、ウガンダの革命体制における権力の文脈と、意味と隠喩が蓄積された過程であった初期の体制の歴史との相互作用を問題にする。この文脈は、植民地時代以前の愛国心から植民地時代以降の軍閥政府へ、そして大衆統治への変化の試みから生じる政治的移行問題を活気づけるのである。この革命体制の構築プロセスには、議論するとおり、ゲリラ戦による権力へのアクセスだけでなく、市民統合メカニズムも含まれるのである。